慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	陽明文庫蔵「道書類」の紹介(五) 『法然上人念佛教化詞』翻刻・略解題
Sub Title	
Author	恋田, 知子(Koida, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2009
Jtitle	三田國文 No.49 (2009. 6) ,p.39- 46
JaLC DOI	10.14991/002.20090600-0039
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20090600-0039

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

陽明文庫蔵「道書類」の紹介（五）

『法然上人念佛教化詞』翻刻・略解題

恋田知子

前号に続き、陽明文庫蔵「道書類」のうち、『法然上人念佛教化詞』を紹介する。これまでも述べたように、陽明文庫蔵「道書類」は、仮名法語を中心に、あわせて十八種類の書物が一括されたものであり、慶長・元和年間（一五九六―一六二四）の奥書を有するものが含まれていることや、とりたてて書写時期の異なるものも見えないことなどから、本書についても、おそらく同じ時期に書写されたものと推察される。[1]

内題に「法然上人念佛教化詞」と記される本書は、『法然上人行状画図』（四十八巻伝）の抄出本である。法然伝の抄出本としては、同じく陽明文庫に蔵される『黒谷上人絵詞抜書』が知られているが、[2] 本書はそれとは異なる箇所を抄出するものである。すなわち、『法然上人行状画図』巻二十所収「河内国天野の四郎」話、巻二十二所収「往生の用心百四十五ケ条」などを収めている。十四世紀半ば、知恩院の総力を背景に、宮廷絵師や能書家を総動員して制作され、「勅修御伝」とも称された四十八巻伝が、その後の貴族圏においてどのように享受されたのか、先の『黒谷上人絵詞抜書』同様、その一端をうかがわせる点で、本書は抄出本ながら貴重な伝本のひとつとして位置づけられよう。書誌については、以下のとおりである。

・函架番号　近下―七二―リ
・形態　写本。一冊。仮綴。
・寸法　縦二九・五糎。横二二・〇糎。
・表紙　本文表紙共紙。楮紙。
・丁数　墨付二十三丁。
・本文　半葉七行。漢字平仮名交じり。字高約二三・〇糎。
・内題　「法然上人念佛教化詞」
・奥書　なし。
・印記　一丁表右上に「陽明蔵」の朱額形印あり。

翻刻に際して、本文は底本に忠実を期したが、私に句読点を打つなど、読解の便宜をはかった。

注

（1）陽明文庫蔵「道書類」の詳細については、『三田國文』連載の翻刻紹介のほか、拙稿「室町期の往生伝と草子―真盛上人伝関連新出資料をめぐって―」（『唱導文学研究』第六集　三弥井書店　二〇〇八年）、拙稿「説法・法談のヲコ絵―『幻中草打画』の諸本―」（『仏と女の室町　物語草子論』笠間書院　二〇〇八年）、拙稿「比丘尼御所文化とお伽草子―『恋塚物語』をめぐって―」（徳田和夫氏編『お伽草子百花繚乱』笠間書院　二〇〇八年）を参照されたい。

(2) 井川定慶氏『法然上人絵傳の研究』（法然上人傳全集刊行會　一九六二年）、法然上人傳研究會編『法然上人傳の成立史的研究』（知恩院　一九六二年）、拙稿『慈巧上人極楽往生問答』にみる念仏と女」（『仏と女の室町　物語草子論』笠間書院　二〇〇八年）など参照。

【附記】

本書の閲覧ならび翻刻の御許可を賜った、財団法人陽明文庫に深く感謝申し上げる。また、本書の翻刻・考察に際して、御教示賜った、陽明文庫文庫長名和修先生に、心より御礼申し上げる。

なお、本稿は科学研究費補助金（二〇八二〇〇四六）による研究成果の一部である。

【翻刻】

法然上人念佛教化詞

河内國に天野の四郎とて、強盗の張本なる物ありけり。人をころして寶をかすむる事を業して世をわたりけるか、年たけてのち上人の化導にきし、出家して教阿弥陀佛と名つけけり。常に上人の御もとにまいり、教訓をかふりけるか、或時夜はんはかりに上人おきたまひて、ひそかに念仏したまふかとおほしき事ありけり。教阿弥陀佛うちしはふきたりけれは、上人やかてふしたまひぬ。ね入たまへる様にてその夜もあけにけり。教阿弥陀仏、こゝろのうちにいと心へぬさまかなとおもひけれは、尋申に及ばてやみにけり。ほとへてのち又まいりたるに、上人は持仏堂におはしませは、教阿弥陀佛は

」（1ウ）

」（1オ）

大床に伺候して申けるは、無縁の物にて在京かなひかたく侍は、相模の國河村と申所に、相しりたる物候をたのみてまかり下侍り。然に年たけぬれは、又見参に入らん事もかたく候。もとより無智の者にて侍へれは、甚深の法聞をうけたまはりし時も、その甲斐あるへしとも覚侍す。只詮をとつて決定往しやう仕ぬへき御一言をうけたまはりて、生涯の御形見に備へ侍らんと。上人のたまわく、先念仏には甚深の義と云事なし。念仏申物は必往生すと知るはかりなり。いかなる智者學生なりとも、宗あかささらん義をは、いかてかつくり出していふへきや。ゆめ〳〵甚深の義あるらんと、ゆかしくおもはるへからす。念仏はやすき行なれは、申人は多けれとも、往生する物のすくなきは、決定往生の故實をしらぬゆへなり。去月に又人もなくて御房と源空と只二人ありしに、夜はんはかりにしのびやかに起居て念佛せんをは、御房はきかれけるかとおはせられけれは、寝耳にさやかにあらんとうけたまはり候きと申けれは、それこそ、やかて決定往生の念佛よ。虚假とてかざる心にて申念仏が往生せぬなり。決定往生せんとおもはゝ、かざるこゝろなくして、まことの心にて申へし。ゆいかいなき少もの、若又畜生なんどにむかひては、

」（2オ）

」（2ウ）

」（3オ）

かざる心はなけれとも、友同行は云に及はす。
その外つねになれみる妻子春属なれとも、
東西を弁る程の者に成りぬれは、それ
ためにかならすかざる心は發るなり。人の中に
すまんには、その心なき凡夫は有へから
す。凡て親も疎も貴も賤も、人にすきたる往
生のあたはなし。それが為にかざる心を發して、
順次の往生を遂されはなり。さりとて獨居も
叶はす、いかゝして人目をかざる心なくして、まこ
との心にて念仏すべきと云に、常に人に
ましりて、静なる心もなく、かざる心あらん物は、
夜さし更てみる人もなく、聞人もなからんとき、
忍びやかに起居て、百返にても千返にても、多
少心にまかせて申さん念仏のみぞ、かさる心も
なけれは、佛意に相應して決定往生はとゞへ
き。此心を得なは必しも、夜にはかきるべからす。
朝にても晝にても夕部にても、人の聞憚
からむ所にて、つねにかくのことく申へし。所
詮決定往生をねかふ、まことの念仏申さんする
かざらぬ心ねを、譬は盗人ありて、人の財を思
かけぬすまんとおもふ心は底にふかけれとも、
面はさりけなきやうにもてなして、かまへてあ
やしけなる色を、人に見えじとおもはんかご
とし。そのぬすみこゝろは、人全くしらねは、
すこしもかさらぬ心なり。決定往生せんする

」（3ウ）

」（4オ）

」（4ウ）

」（5オ）

心も又かくのことく、人多くあつまり居た
らん中にも、念仏申る色を人に見せずして、
心にわするましきなり。その時の念佛は、佛
より外にはたれか知るへき。佛しらせたまはゝ
往生なんそ疑と仰られけれは、教阿弥陀佛
申さく、決定往生の法聞をこそ心得候ひぬれ。
すてにさとりきわめ侍り。此おほせをうけたま
はさらましかは、このたびの往生はあぶなく
候はまし。但、此仰の如くにては、人のまへにて
念珠をくり、口をはたらかす事は、あるましく
候やらんと。上人のたまはく、それ又僻韻なり。
念佛の本意は常に念を詮とす。されは念
念相續せよとこそすゝめられたれ。譬へば
世けんの人をみるに、おなし人なれとも豪憶
相わかれて、憶病の者になりぬれは、身のため
くるしかるましき、聊のいかりをもおぢお
それて逃かくる。豪の者になりぬれ
は、命をうしなふへき。こわき敵の、しかも
逃かくれなはたすかるへきなれとも、すこし
もおそれす、一しさりもせさるかことし。是
がやうに、真偽の二類あり。地躰偽性に
して、かさる心ある物は、身のために要なき
いさゝかの事をも、必偽かざるなり。まことの心
ありて虚言せぬものは、聊の矯餙して、身
のために大にその益あるへき事なれとも、身

」（5ウ）

」（6オ）

」（6ウ）

の利をは帰りみぬ、底にまことありて少も
かさる心なし。是皆本しやうに請て生れつき
たる所なり。其まことの心の者の往生せんと思
いて念佛に帰したらんは、いかならむ所いかなる
人のまへにて申とも、少もかさる心あるまし
けれは、真實の心の念仏にして、決定往生す
へき也。何ぞ是をいましめん。又地躰はいつ
はり性にして、世間さまに付ては、いさゝか不定
の事もありしかとも、知識にあひて發心
して、往生せんとおもふ心ふかく成りぬれは、
念々相續せんとおもひて、いかなる所いかなる人
のまへにても、無相にひた申に申さん物、是
又真實の心の念仏なれは決定往生す
へき也。全く制のかきりにあらす。いまいふ所は、
三心の中に一心もかけぬれは、往生せぬと
釈したまへるに、三心の中の真實心、人ことに
發りたけれは、その真實心をおこすへき
やうをいふはかりなり。されはとて、たゝの時念
仏な申そとはいかゝすゝむへきと。又教阿弥陀仏
申さく、さきにおほせ侍るやうに、夜る念仏
申さんには必ず起居候へきか、又念珠袈裟
をとり侍るへきかと。上人のたまはく、念仏の行は
行住坐臥をきらはぬ事なれは、臥ても
申さん共居て申さん共、心にまかせ時によるへし。
念珠をとり袈裟をかくる事も、又折により

」（7オ）

」（7ウ）

」（8オ）

」（8ウ）

躰にしたかふへし。たゝ詮ずる所威儀はいかにも
あれ。此たびかまへて往生せんと思ひて、まこと
しく念仏申さんのみと大切なると仰られ
けれは、教阿弥陀佛、勧喜躍踊し合掌礼拝
して罷出にけり。翌日に法蓮房信空のもと
へゆきていとまこいしけるに、昨日上人の授
たまへる決定往生の義とて申いたして、此
たびの往生は、すこしも疑なきよしよろ
こび申て、東國へ下向しにけり。其後上人
御まへにて、法蓮房此事を申いたして、
侍りけるやと申されけれは、その事なり。さる
舊盗人と聞置て侍りし程に、對機説法
して侍りき。一定心得たりけにこそ見へし
かともと仰られけれは、教阿、彼河村に下
て住侍りけるか、所勞つきて終焉ニ望けるに、
同行に語ていはく、我往生は決定也。是即
深く上人の教を信する故也。往生のやう必
上人にまいりて申へしと遺言して、正念
たかはす、合掌みたるゝ事なく、高聲に
念仏数十返唱へておはりにけり。同行やかて
上洛して、遺言の次第くはしく上人に申
けれは、よく心へたりとみへしが、相違せさり
けり。あはれなる事なりとそ仰られける。
上人ある所には三心のやうをくはしくをしへ、
ある所には三心のさた詮なきよしおほせら

」（9オ）

」（9ウ）

」（10オ）

れたり。是人によるへき事なり。名号を唱へけれは、必往生すとはかりまめやかにたのみてとなふれは、その人の心におのづから三心もそなはりぬるを、中くに三心とてことくしく申程に、還て信心を亂る事も侍る也。かゝる人の為には、三心のさたむやくの事なるへし。若日ごろは疑の心もあり、三心くせぬ人も聖教をかくすれは、道理におれて三心のおこる事もあれは、さやうならん人のためには、大せつなるへきを、一かうに是をひせば、又そのとが有へし。此すぢを心へなは、上人両様の御勧進更に相違をなすへからさるものなり。

」（10ウ）

法性寺の左京大夫信實朝臣の伯母なりける女房の、たつね申けるに付て、上人の御返事にいわく、念佛の行者の存候へきやうは、後世の恐往生を願て念仏すれは、おはる時かならす来迎せさせたまふよしを存ちて、念仏申より外の事候はす。三心と申候もかさねて申時は、只一ッの願にて候なり。そのねかふ心のいつわらず、かざらぬかたをは至誠心と申候。この心のまことにて、念佛すれは臨終に来迎すといふ事を一念も疑ぬかたを深心あとは申候。此上にわか身もかの土へまいらんとおもひ、行業をも往生のためとむくるを廻向心とは申候也。此故にね

」（11オ）

」（11ウ）

かふこゝろをいつはらすして、けに往生せんと思ひ候へは、おのづから三心は具足する事にて候也。

抑中品下生に来迎の候はぬ事はあるまじきなれとも、とかれぬにては候はす。九品往生に、各あるへき事の略せられてなき事も候也。善導の御こゝろは、三心も品々にわたりて有へしと見へて候。品ことにおゝくの事候へ共、三心と来迎とは必有へきにて候也。往生を願はん行者は、かならす三心を發すへきにて候へは、上品上生にこれを説て余の品々をもこれになそらへてしるへしみえて候。又我等戒品船筏もやふれたれは、生死の大海をわたるへき縁も候はす。智恵のひかりもくもりて、生死のやみをてらしかたし。聖道の得道にももれたる我等が為にほとこしたまふ。他力と申候は第十九の来迎の願にて候へは、文に見えす候とも、かならす来迎は有へきにて候也。ゆめくに御疑あるへからす候。あなかしこくに。源空

」（12ウ）

」（13オ）

或人往生の用心につきておほつかなき事を百四十五ケ条まてしるして、たつね申たりけるに、上人御返事ありき。

せうくこれをしるす。

一、心を一ッにして、心よくなをり候はすとも、何事をおこない候はす共、念仏はかりにても浄

」（13ウ）

」（14オ）

土へまいり候へきか。答、心の亂るゝはこれ
凡夫のならひにて力およばす候。只心を一ッに
して、よく御念仏を申させたまはゞ、その罪
を滅して、往生させたまふへき也。そのまう
念よりもおもきつみも、念佛申候へはうせ
候なり。
一、日所作は必數を定候はすともよまれんに
したがいてよみ、念仏も申候へきか。
こたへていわく、數をさため候はねは懈怠になり
候へは、かずを定候がよき事にて候。
一、にら・ひともじ・ひる・鹿をくいて香せ
候はす共、常に念仏は申へきやらん。
こたへていわく、念佛は何にもさわらぬ事にて候也。
一、念佛をは、日所作にいくらはかりあてゝか
申候へき。
答ていわく、念仏の數は一万べんをはしめとして
二万三万五万六万乃至十万までも申候なり。
この中に御心にまかせて、思食より候はん
程申させおはしますへし。
一、五色の糸は佛には左にとおほせ候き。我手
にいつれのかたにて、いかゝひき候へき。
答ていわく、左右の手にてひかせたまふへし。
一、斎をし候て功德にて候やらん。かならすすへき
事にて候やらん。
一、答ていわく、斎は功德うる事にて候也。六斎の御

」（14ウ）

」（15オ）

」（15ウ）

斎そさも候ぬへき。又御大事に御わつらひなとも
おこらせたまひ候はゝ、さなく共只御念仏たに
も御心にわすれさせたまはすは、それにて
生死をはなれ、浄土に往生させさせおはし
まさんする事は、これによるへく候。
一、必ず佛を見、糸をひかへ候はす共、わか申さす
とも、人の申さん念佛をきゝても死し候はゝ、
浄土には往生し候へきやらん。
答ていわく、かならす糸をひくといふ事は
候はす。仏にむかひてまいらせねとも、念仏たに
申は往生し候也。又聞ても往生し候はねは
よく〳〵心ふかくての事にて候。
一、永く生死をはなれ、三がいに生れじと
おもひ候に、極楽の衆生となりても其縁つ
きぬれは、此世に生るゝと申候は、まことにて候か。
たとへ國王共なり、天上へも生れよ。たゝ三界
をはなれんとおもひ候に、いかにつとめおこない
てか、かへり候はさるへき。
答ていわく、これもろ〳〵のひが事也。極楽へ一
たび生れ候ひぬれは、なかく此世に帰る事
候はす。皆ほとけに成る事にて候也。但、人をみ
ちびかんためには、ことさらに帰る事も候。され共
生死にすへる人にては候はす。三界を離れて
極楽に往生するには、念佛にすきたる事は
候はぬ也。よく〳〵御念仏候へし。

」（16オ）

」（16ウ）

」（17オ）

」（17ウ）

一、哥をよむはつみにて候か。
答ていわく、あなかちに得候はじ、但し罪ともなり功徳ともなる。
一、酒をのむは罪にて候か。
答ていわく、のむへくもなけれ共、此世のならい。
一、錫杖をは必よむへく候か。
答ていわく、さなく共そのいとまに念仏一遍も申へし。尼法師こそありく時虫のためによみ候へ。
一、臨終に善知識にあひ候はす共、日比の念佛にて往生はし候へきか。
答ていわく、善知識にあはす共臨終おもふやうならす共、念仏申さは往生すへし。
一、心に妄念のいかにもおもはれ候は、いかゝし候へきや。
答ていわく、只よく念仏を申させたまへ。
一、ねてもさめても、口をあらわて、念仏申候はんはいかゝ候へき。
答ていわく、くるしからす。
一、六斎に、にら・ひる、いかに。
答ていわく、御まいり候はすはよく候。
一、毎日の所作に、六万十万の數遍の念珠をくりて申候はんと、二万三万の念珠を慥に一ッつゝ申候はんといつれかよく候へきぞ。
答ていわく、凡夫のならひ、二万三万をあつ共

」（18オ）

」（18ウ）

」（19オ）

如法には叶かたからん。只數遍のおゝからんにはすくへからず。名号を相續せんためなり。かならすしも數を要とするにはあらす、たゝ常に念仏せんためなり。かすをさためすんば、懈怠のいんゑんなれは、しゆへんをすゝむるにて候。
一、破戒の僧、愚痴の僧、供養せんも功徳にて候か。
答ていわく、破戒の僧、愚痴の僧をするゑの世には、佛のごとく貴へきにて候也。この御つかいに申侍らぬ、きこしめし候へ。此御詞は、上人のまさしき御てなり、阿弥陀経のうらにおしたり。或人往生の用心につけて、条々のふしんをたつね申たりけるに、上人の御返事にいわく、
一、毎日の御所作に六万へんめてたく候。うたがひの心たにも候はすは、十念も一念も往生し候へとも、おゝく申候へは上品に生れ候。釈にも、上品の花臺三奉見慈主を到者ハ皆因念佛多。
一、百万遍の事、佛のぐわんにては候はねとも、小阿弥陀経に、もしは一ッ日、もしは二ッ日ないし七日、念仏申人極楽に生れぬるととかれて候へは、七日念仏申へきにて候。その七日のほとの数は百万べんにあたり候よし、人師しやくして候へは、百万へんは七日申へきにて候へ共、たえ候はさらん人は、八日九日なとにも申され候へし。

」（19ウ）

」（20オ）

」（20ウ）

」（21オ）

されば とて百万へん申さ さらん人のうまる
ましきにては候はす。一念十念にても生れ
候ほとの念仏と思ひうれしさに百万へんの
功徳をかさぬるにて候なり。
一、七ぶん全徳の事、おほせのまゝに候。さてこそ
逆修はする事にて候へ。されはのちの世をと
ぶらひ候はん人も、それをたのますして、我と
はげみて念仏申ていそき極楽へまいりて、
五通三明のさとりて、六道四しやうのしゆ生を
りやくし、父母師長の生所をたつね、心の
まゝにむかへとらんとおほしめすへきにて候也。
又當時日ごとの御念仏をも、かつ〳〵ゑかう
しまいらせられ候へし。なき人のために
念仏ゑかうし候へは、阿弥陀佛ひかりをはなち、
地獄餓鬼畜生を照したまひ候へは、此三悪道
にしづみてくをう冊る物、そのくるしみやす
まりて、いのちおはりてのち、解脱すへきにて候。
大経にいわく、若在三逐勤苦之處一、見此
光明皆得二休息一、無復苦悩壽終之後、皆蒙
解脱を。」（22ウ）

大唐慈恩大師西方要決云、
諸佛願行　成此果名　但能念号　見包衆徳
故成大善　不癡往生　文　果名者弥陀六字之名号也。」（23オ）

天台恵心僧都釈云、
因行果徳　自利々他　内證外用　依報正報
恒沙塵數　無邊法聞　十方三世　諸佛功徳
皆迷攝在　六字之中　是故稱名　功徳無盡
此二文法相天台之祖師之尺也。弥陀六字之名号也。内三一切之諸佛
願行ノ功徳迷ノ納ニ云文也。深ク可秘々々。」（23ウ）